# 朽木出身の偉人

## ―池田白鷗・高島玄俊―

高島市出身の偉人の中で、朽木に生まれ、幕末から明治初頭に活躍した人物をご紹介します。

### 書画家　池田白鷗

池田白鷗は文政12（1829）年、朽木大野に生まれ、23歳で朽木家に仕えました。明治維新後は京都府の役人を務め、53歳で隠居すると、80歳で亡くなるまでを故郷の朽木で過ごしました。

絵や和歌が堪能であった白鷗は、高島郡長河毛三郎の依頼により高島郡公会堂「慶成館」に作品を寄付したほか、朽木村能家の地籍図作成に携わるなど、村人のために多くの絵を残しています。さらに、宮内省御歌所長の高崎正風に招かれ、当時皇太子であった大正天皇に謁見するなど、歌人としての評価も確かなものでした。

一方、白鷗が残した日記には、朽木家江戸屋敷の留守居役を務めた際の出来事が記されており、幕末の朽木家を支える優秀な武士としての一面を垣間見ることができます。

西王母図「池田白鷗書画集」（平成元年朽木村発行）より

### 府内藩医　高島玄俊

高島玄俊は文政元（1818）年、朽木宮前坊で生まれました。幼い頃から学問に励んだ玄俊は、16歳になると讃岐国丸亀（香川県丸亀市）に修行奉公に出て、藩医の河田玄叔に内治漢方を学びました。やがて京都に出て西洋医学や本草学、儒学にも通じ、さらに見聞を広げるため九州地方に旅立ち、30歳の頃には豊後国府内（大分県大分市）の今在家町で医院を開業しました。

その後も玄俊は一層勉学に励む一方で、自身は質素倹約を徹底し、貧しい人からは薬代を取らず、流行病の治療法開拓に努めました。また、医療に対する誠実さに加えて人々からの人望も厚かったため、38歳の時には府内藩医事監格となりました。

明治維新後も府内に残り、飢饉に見舞われた人々の救済を続け、明治5（1872）年に学制が制定されると、教職員として学生の指導にあたり、61歳でその生涯を閉じました。現在、邇々杵神社の境内にある玄俊の生家跡には記念碑が立っており、自身の信念のもと医療・教育に取り組んだ玄俊の生きざまを讃えています。

問 文化財課 ☎（25）8559

高島玄俊記念碑

**編集雑感**

表紙の写真は、満開になった海津大崎の桜並木です。

例年なら満開の桜の写真はこの5月号の制作には間に合わないことが多いのですが、今季は開花が早く、天候も味方して、バッチリタイミングが合いました！

このように自然相手の撮影にはタイミングが大事です。いま、ここにある一瞬のチャンスをとらえ、高島の絶景を発信していきます。（Y）

広報たかしま
令和3年5月号 No.256
発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。